

# 個別療育における行動の切り替え支援の質的研究

—太田ステージを用いて—

人間科学研究科 博士前期課程2年 真木 希代子

## I. 問題

文部科学省は、2004年に発達障害者支援法を公布し、国や地方公共団体が発達障害の早期発見・早期支援に努めるように通知した。また、2022年に行った「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」では、1クラスに3名は発達障害の疑いがある子どもがいることが明らかとなった。DSM-5（APA, 2013）ではASDについて、5歳までの機能的言語の獲得は予後良好の兆候とされており、これらのことから早期療育へのニーズは近年高まりを見せている。

厚生労働省は、2012年に児童福祉法の改正を行い、障害種別で分かれていた障害児の通所による施設体系を、障害児通所支援として一元化した。設立法人の規定が緩和されることにより、児童発達支援事業はあらゆる事業が参入できることとなった。短期間での急増は著しく、児童発達支援ガイドライン（厚生労働省, 2017）によると、2012年では約1,700カ所であった事業所数が2017年には4,700カ所になったとされている。

児童発達支援ガイドライン（厚生労働省, 2017）には「児童発達支援が提供すべき支援の内容を示し、支援の一定の質を担保するための全国共通の枠組みを示す」とされているが、小関ら（2021）は、具体的な内容については言及がなく、質の保証にはつながっていないと論じている。また、杉原（2015）は、指導的配慮の下でも子どもの逃避・回避機能を持つ問題行動が維持され、課題の習得に結びつかない事例も見受けられると指摘している。

発達早期の子どもに対する療育方法として、太田ステージがある。太田ステージはASDの基

本障害をシンボル機能の発達にあるとし、その子どもの心の世界を知り、次の段階への発達を促すことを認知発達治療の目的としている（太田ら, 2020）。立松（立松・齋藤, 2021）は、児童発達支援ガイドラインにおいて発達支援（療育）が明記されていることについて、事業所等では子どもとのコミュニケーションについて模索しているところもあるだろうと指摘し、太田ステージ評価は、このような時代に、専門的アプローチと、地域の子育て機関における療育との間のハードルを緩和する役割を果たしていく可能性があると論じている。

しかし太田ステージの先行研究で、個別療育において逸脱行動を切り替え、課題に戻るための具体的な支援方法について書かれたものは、筆者が検索した範囲では見つけれなかった。

## II. 目的

本研究は、評価法や療育法として太田ステージを用い、1事例の記述と分析を通して、個別療育場面において子どもが示す、逃避や回避といった逸脱行動に対する、有効な行動の切り替え支援方法の仮説を生成することを目的とする。

## III. 方法

### 1. 研究協力児

研究協力者は、多動や癇癪等を主訴とする、調査開始時2歳10か月の幼児である。幼児であることから「研究協力児」と表記する。

### 2. 手続き

研究協力児の自宅において週に1回、母子同室で30分間の個別療育を実践し、療育実践前と8回の療育実践後に各1回のアセスメントを実施した。実践期間は11週間であった。事前説明時に、太田ステージ評価（以下、LDT-R）および療育の実施場面をビデオ録画することに対して、保護者の許可を得、毎回の療育終了時に保

護者に対してフォローのための振り返りを15分間実施した。

### 3. アセスメント方法

LDT-Rを用いる。評価バッテリーとして、津守・稲毛式乳幼児精神発達検査（以下、津守式）と行動観察を実施した。

### 4. 療育実践前アセスメント結果

LDT-Rは、StageⅢ-2 前期という判定になった。定型発達児の3～4歳に相当し、研究協力児は年齢よりも早い認知発達を示していることが判った。StageⅢ-2は太田ステージでは逸脱行動が生じやすい発達段階とされており、武藤（太田ら, 2020）は、自我意識の芽生えに伴う反抗的な行動や、一番でないことや勝ち負けでパニックを起こしやすいことを指摘している。

津守式は、1～3才まで用を実施し、発達年齢は3歳0.5か月という判定となった。発達輪郭表では運動領域（3歳0か月）と探索・操作領域（2歳0か月）との間に差がある結果となった。

行動観察では、年齢相当の発語が見られ、視線もよく合い、人懐こい様子が見られた。粗大運動では3歳台で獲得される高い運動能力が観察された一方で、微細運動では筆記具の把持や描画で1～2歳台の巧緻性が観察された。

### 5. 個別療育プログラム

筆者がセラピストとして研究協力児に個別療育を実践をする完全な参与の立場で観察を行った。個別療育プログラムは、アセスメント結果と『自閉症治療の到達点 第2版』（太田ら, 2020）と『認知発達治療の実践マニュアル 自閉症のStage別発達課題』（太田・永井, 1992）に基づいて作成した。

### 6. 分析方法

心理学的エスノグラフィーの手法（柴山,

2006）を採用した。立松（2019）の、子どもの問題行動は認知発達に依存する行動であるという考えを援用し、「その逸脱行動がStageⅢ-2の認知発達に依存するものであるかどうか」を分析の枠組みとし、立松（2011）がまとめた「目標設定のためのStage別めやす」より、「社会的優位性（一番病など）」と「ルール（人にも守ることを要求する）」の2側面から、エピソードを詳細に見ることとした。まず個別療育のサマリーから逸脱行動のエピソードを切り出し、分析の単位とした。次に、切り出したエピソードを読み込み、分析の枠組みに照らし合わせて「社会的優位性」と「ルール」の2種類に分類した。そしてエピソードに「どのような逸脱行動をとっているのか」という観点から、研究協力児の行動にラベル付けを行った。次に、ラベル付けを行った行動には「どのような特徴があるのか」という観点からカテゴリー化した。類似の特徴があると考えられた行動は束ねてカテゴリー化した。さらに、析出されたカテゴリーに対して、セラピストがどのように切り替え支援を行っていたのかについてもラベル付けとカテゴリー化をし、具体的なエピソードと共に検討した。

## IV. 結果

### 1. 療育実践後アセスメント結果

LDT-Rは、StageⅣ前期という判定になった。定型発達児の4～7歳に相当し、生活年齢よりも1歳以上早い認知発達であることが判った。

津守式は、研究協力児が3歳の誕生日を迎えたため、3～7才まで用を実施した。3～7才まで用には発達年齢換算表が無いいため、各領域の発達年齢は津守・磯部が定めた診断法（1965）に従って、発達輪郭表から判定した。4歳0か月に達している社会領域・生活習慣領域と3歳0か月であった探索領域の間に差がある結果となった。

## 2. エスノグラフィー分析結果

全8回の個別療育場面において切り出した逸脱行動のエピソードは、全部で46個であった。その内、社会的優位性に関するエピソードは23個、ルールに関するエピソードは0個、どちらの枠組みにも当てはまらない欲求の充足に関するエピソードは23個であった。ルールに関するエピソードが0個であった理由は、個別療育が家庭での日常生活や、園での集団生活とは異なる状況であったことから、研究協力児が何らかのルールを保持していても、適用される場面が生じなかったことが推測される。

## V. 考察

### 1. エスノグラフィー分析結果についての考察

StageⅢ-2に見られる社会的優位性へのこだわりによる逸脱行動に対して、セラピストは「逸脱行動には注目しない」「失敗や不安には気付かないフリをする」という方略を取った後に「次の活動の教材を見せる・触らせる」「教材を使った別の遊びを見せる」といった切り替え支援を行うことが有効であると示唆された。

### 2. アセスメント結果についての考察

津守式の探索領域結果とエピソードの関連から、StageⅢ-2の子どもの逸脱行動を予防するためには、その子どもの持つ感覚機能の不安定さを統合させる教材教具を用いることが有効であると示唆された。

### 3. 今後の課題

本研究は1事例であったため、今後の課題は、生成された仮説が、他の事例でも有効かどうか累積的に実践を重ね、妥当性を確認することである。そのためには、介入群と統制群による比較対照実験による仮説の検証や、他のStageの子どもに対しても、仮説が有効かどうかの検証が必要である。それらの検証ができれば、今後、あらゆる発達段階にある子ども達へ

の発達支援の現場での効果的な支援方法についての実践的な示唆や、集団療育やインクルーシブ保育の現場での応用など、更なる発展に寄与できるものと考ええる。

## 引用文献

- APA (2013). DSM-5. Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed). APA, Washington, D. C. (高橋三郎・大野 裕 (監) (2014). 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院.)
- 小関俊祐・杉山智風・伊奈優花・岸野莉奈・松崎文香・池田美樹・久保義郎 (2021). 児童発達支援事業と放課後等デイサービスにおける発達障害児に対する支援効果 桜美林大学研究紀要, 人文学研究, (2), 68.
- 厚生労働省 (2017). 児童発達支援ガイドライン <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihovenfukushibu/0000171670.pdf> (2022.10.16閲覧).
- 文部科学省 (2004). 発達障害者支援法 [https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihoen-fukushibu/shienhou\\_2.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihoen-fukushibu/shienhou_2.pdf) (2022.12.25閲覧).
- 文部科学省 (2012). 児童福祉法等の改正による教育と福祉の連携の一層の推進について [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1320467.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1320467.htm) (2022.10.16閲覧).
- 文部科学省 (2022). 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について. [https://www.mext.go.jp/content/20221208-mext-tokubetu01-000026255\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221208-mext-tokubetu01-000026255_01.pdf) (2022.12.25閲覧).
- 武藤直子 (2020). 太田StageⅢ-2概念形成の芽生えの段階. 太田昌孝・永井洋子・武藤直子 (編) 自閉症治療の到達点 第2版 日

本文化科学社, pp179-192.

太田昌孝・永井洋子・武藤直子（編）（2020）.  
自閉症治療の到達点 第2版 日本文化科学社.

柴山真琴（2006）. 子どもエスノグラフィー入門——技法の基礎から活用まで. 新曜社.

杉原聡子（2015）. 課題学習において逸脱行動を示す知的能力障害児に対する対戦形式による指導 人文論究, 65 (2), 127-138.

立松英子（2011）. 発達支援と教材教具Ⅱ——子どもに学ぶ行動の理由 ジアース教育新社.

立松英子（2019）. 発達支援と教材教具Ⅳ——「席を立つ」子どもへの認知発達に応じた合理的配慮 ジアース教育新社.

立松英子（2021）. 太田ステージと療育や特別支援教育との接点. 定義と実施手順. 立松英子（編著）・齋藤厚子 子どもの心の世界がみえる太田ステージを通した発達支援の展開 学苑社, pp6-8, pp13-21.

津守 真・磯部景子（1965）. 乳幼児精神発達診断法3才～7才まで 大日本図書.

津守 真・稲毛教子（1995）. 増補 乳幼児精神発達診断法0～3才まで 大日本図書.